

現代史の授業で「不適切な感情」を どのように扱うか

高江洲 昌 哉

1：はじめに

ここ数年にわたって授業のゲストスピーカーとしてお世話になっている相模湖・ダムの歴史を記録する会の関係者から、昨年（2019年）の7月に、開催する追悼会で配布する『しおり』に掲載する短文の依頼を受けた。そこで、「青山学院大学のレポートとその周辺」と題するエッセーを寄稿した。その文中に「戦争回避のために、『戦争反対』と叫ぶことも大事ではあるが、それ以上に『戦争に向かう』心性（過剰な愛国心、排外主義など）を内省する能力も必要であろうと考えて、試行錯誤しながら今日に至っている」¹と書いた。「試行錯誤」と述べているように、効果的な授業案を用意しているわけでもなく、執筆時に特段妙案を持っているわけでもなかったのも、偽りなき心境として「試行錯誤」の現状を吐露したものであった。ところが幸運にも、2019年の夏季休暇時に科研調査の一環で、イギリスを訪問し、「『戦争に向かう』心性…を内省する」授業をおこなう上でヒントになる経験をし、2019年度の導入と講義全体の見通しを得ることができた。本稿は、かかる実践の提示と学生の反応を記すことで、授業実践の成果と課題を紹介したいと思う。

2019年9月に「民衆暴力と社会変容」をテーマとする科研メンバーの一員として、北アイルランドを訪問した。北アイルランド紛争の現場を見るという目的であったが、「百聞は一見に如かず」を実感する、得るところの多い調査であった。その成果の1つが「壁画のデザイン」（写真1から3）とその記録

¹ 『第41回 相模湖・ダム建設殉職者合同追悼会しおり』（2019年、20頁）

現代史の授業で「不適切な感情」をどのように扱うか



写真 1



写真 2



写真3

展示の方法を見たことである²。北アイルランドでは紛争で犠牲が生じた場所などに壁画を描く文化があり、紛争時には「憎悪」を昂揚させるデザインが主流であったが、和解後は「憎悪」ではなく平和に資するデザインに向かっていったそうである。もっとも新しいデザインの壁画は新しい場所に作られるものではなく、既存の壁画のデザインを塗り替えるという作業であった。そして、興味深いことに元の絵も記録に残して展示説明の資料として使われていた。

この壁画の展示方法は印象に残り、「現代史B」の授業の初回に使うことにした。授業の初回に「更新の可視化／不可視化」をテーマにして、前掲の写真を含め、北アイルランドの事情を冒頭にもってきた。その後、北原糸子氏の「東京府における明治天皇聖蹟指定と解除の歴史」³を配布して、以下のように授

² 北アイルランドの紛争、壁画文化については、福井令恵『紛争の記憶と生きる—北アイルランドの壁画とコミュニティの変容』（青弓社、2015年）を参照の事、その他、和解後のアイルランド紛争の記憶とその取り組みについては、尹慧瑛『暴力と和解のあいだ—北アイルランド紛争を生きる人びと』（法政大学出版局、2007年）、酒井朋子『紛争という日常—北アイルランドにおける記憶と語りの民族誌』（人文書院、2015年）などがある。

³ 『国立歴史民俗博物館研究報告』121集、2005年3月（機関リポジトリより入手）。

現代史の授業で「不適切な感情」をどのように扱うか

業を進めた。

北原氏の論文は戦前の天皇制国家のもとで多数指定された聖蹟が戦後解除され、人知れず「無くなった」ことを踏まえ、「戦前のイデオロギーによる国民強化のシンボリックな事例として、否定されるべき対象という位置づけは理解できるが、歴史上なかったことにするかのような叙述のあり方は、歴史認識の客観性という点から疑問を感じる」⁴という記述があり、授業ではこの部分を紹介し、次のように話題を展開した。

歴史研究で「あったことを無かったことにしてはいけない」という指摘があり、もう一方で平和学習でも戦争体験の継承も言われている。とはいえ、平和学習で言うところの継承は「戦争の苦労」など悲惨の部分であって、戦争を支持する敵愾心などは含まれていないのではないかと話した。確かに、平和学習で憎悪などを正面切って継承しましょうということは、頓馬な話である。とはいえ、戦争がなぜ起き、それを支持する心性はどのようなものであり、戦争を続けるために、どのような感情が動員されたのかを考えた場合、敵愾心もさることながら、自分たちは正しいのに不当に扱われているといった「不適切な感情」が存在したことは否定できないものである。そうであるならば、かかる「不適切な感情」があたかもなかったかのように、戦争が起きた時代の社会を教えることは問題ではないかと話を続けた⁵。

こうした流れを踏まえ、初回授業のまとめとして、(1) 戦争体験を伝えるといっても、この行為のなかに「戦意高揚」、「敵愾心」、「憎悪」など、“問題のある部分”は入っていないこと、(2) 歴史の何を学ぶかは、現時点のある価値観で、何を教え／教えないかは判断される（とはいえ、現時点の価値観を無謬的に扱うのではなく、それらを含め、史実を評価選別する価値観を吟味する、ある種の普遍的視座を検討することが必要である）こと、(3) ナショナリズム

⁴ 同上、287頁

⁵ もちろん、従来の平和学習にも過剰な愛国心教育による無批判性が起きたことを反省的に捉える実践もある。本稿は、愛国心教育に限定されない、「自分たちは正しい」という感情や社会の雰囲気にも主眼を置いている。

ムの「克服」ではなく、「調整」方法を身に着けるため、自省的に歴史を見ることが必要というまとめをした。

以上の概略で描いたように、2019年度の現代史Bは「不適切な感情」を肯定することなく、無視することなく、どのように取り扱うべきかを2019年度の課題として、授業を進めることにした。

2：授業の実践から

さて、本稿のタイトルは「不適切な感情」と表記しているが、授業で中心的に扱ったのは「自分たちは正しいのに不当に扱われている感情」である。そのため、授業の第2回で紹介したのは、満州事変後に、ある高等女学校の校友会雑誌に載せられていた満州派遣部隊への慰問文である⁶。

（資料・慰問文—A）若し私が男であったなら、満州へ行つてうんと支那人を懲らしめてやりたいと思います。然しそれも出来ない事で御座います。（中略）

日本では無理に戦争をしようというのではございません。それを国際連盟は支那の嘘な訴えを聞いて日本は満州を取ろうとして居ると以ての外のを申します。その話を聞く度に、私は心身も張り裂けんばかりに残念に思います。

（資料・慰問文—B）私達が毎日軍人たる校長先生より、日支紛争時事件について話を伺い、全く支那国民の乱暴なる行動そしていつわり多き国民性は、実に口惜しくなりません。私達日本人は正義を守らなければなりません。正義の士であるあなた方に、心から感謝を捧げます。

（資料・慰問文—C）（私達は校長先生より、新聞以上に詳しく、兵隊さんの活躍を聞いていますと述べて）、如何に我が兵隊さんが、大和魂があるかわかります。我が兵隊さんこそ、白梅にたとえてよいでしょう。

この慰問文の外に、「大東亜戦争開戦の詔書」（米国及英国ニ対スル宣戦ノ証書）も紹介したが、そこには「抑々東亜ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄与スルハ丕顕ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠慮ニシテ朕カ拳々措カサル所

⁶ 学校名をふせたため、出典は明記していない。また、現在では不適切な表記もあるが時代背景を知るため、そのまゝの表記にしている。

現代史の授業で「不適切な感情」をどのように扱うか

…中華民國政府曩ニ帝国ノ真意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亜ノ平和ヲ攪乱シ遂ニ帝国ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ…（英米両国は）武備ヲ増強シテ我ニ挑戦シ更ニ帝国ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ与ヘ…帝国ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ…我ヲ屈從セシメントス…帝国ハ今ヤ自存自衛ノ為」と、自分たちの「平和的行動」が支持されず、生存が危うくなる事態が設けられたことに対し、正当性の回復を要求する「被害者ナショナリズム」の論理があった⁷。

開戦の詔書の論理を紹介したあと、「今、アジア・太平洋戦争は、侵略戦争と評価されていますが、『侵略戦争をします』といって始める戦争はなく、自分たちは正しい、相手が間違えているといって始めるのが戦争であり、開戦の詔書の字面に沿って歴史を見れば、『日本は悪くない』派に立つのは当然であろう。自己が信じる『正しさ』を内省する能力がなければ、簡単に戦争支持に向かうのではないか」と述べた。

次の第3回（10月8日）では、模範解答の「平和は大事」を書くことが授業の目的ではないということを確認するため、カーチス・ルメイ⁸について調べるよう宿題をだした。

カーチス・ルメイを調べた感想文は、こちらの目論見通り、これまで学校の授業で習うことのなかったカーチス・ルメイが、戦中・戦後の日本に与えた役

⁷ 授業でも述べたことだが、徴用工問題を契機とする日韓対立が起きたとき、相手を批判し、自己の正当性を要求する行動パターンがあったことを想起すれば、必ずしも「先の大戦」を反省したとはいえない（戦争に向かう論理を克服することが難しいこと）がわかるであろう。

⁸ カーチス・ルメイ（1906～1990）は、都市空襲の実行者という側面がありながら、戦後、航空自衛隊の育成に貢献したということで、勲章（勲一等旭日大綬章）が授与されている。このように日本との関係で毀誉褒貶のある人物である。彼の戦争時の活動を見るのか、それとも、戦後の行動を見るかで、評価が分かれる。この宿題は、学生が、彼のどの側面を重視して評価するのか、その違いを確認するために出したものである。ちなみに、荒井信一『空爆の歴史』（岩波新書、2008年）によると、「これまでルメイの役割が誇大に語られてきたことも事実である」（136頁）、「ルメイは、一般住民を焼き殺す焼夷弾攻撃が人道に反することを知っていたが、戦争の必要をそれに優先させた。ルメイが現場指揮官として効果的な戦術を考案し、大量殺戮を実行した責任は明らかであるが、直接には上官（アーノルド）に命じられた任務を遂行したのであった（139頁）とカーチス・ルメイの役割の“適正化”を指摘している。

割を知ること、戦争の語りをナショナリズムの視座で、一枚岩的に截然と切れないことを知り、歴史像を深める契機になったようである。また、授業時に「別途扱う予定」と述べた空襲被害者への補償については、第13回（12月24日）に「空襲被害・徴用工問題など歴史と政治の絡み合いから考える」というタイトルのもと、徴用工問題とあわせて空襲被害者救済法制定を求める運動を紹介し、対韓国向けの「解決済み」言説を再考する授業をおこなった。

また、「戦争とはこういうもの」というコメントがあったので、こうしたコメントへの対応として、『十五年戦争極秘資料集 戦争と障害者』所収の資料を用いつつ戦争で心を病む兵士の実像を紹介した。さらに、『『殺人マシーン』になった兵士が心を病んで市民社会に戻った場合、市民社会はどのように迎え入れるのか』という質問もして、戦場の過酷さと兵士のPTSD問題とも関連付けた話をした。メインの空襲被害について、どこまでルメイを批判できるかについては、第10回（12月3日）の授業で、ゲストスピーカーを招いて「空襲被害と捕虜虐待」の内容で理解を深めた。このテーマは、多摩の空襲を事例に、空襲被害者が捕虜虐待の加害者に向かった歴史について映像を交えて語ってもらうものであった。この第10回の授業内容に関する感想文は第13回で紹介したが、以前の宿題「カーチス・ルメイを調べる」を思い出しつつ感想を書く学生も数人いた。その一例（空襲—A～空襲—E）を紹介したい。

（空襲—A）私は、カーチス・ルメイに関する課題にこたえたとき、「多くの日本人を殺害した人物に、日本から賞を与えることはおかしいのではないか。」という考えだった。しかし、今回の捕虜虐待を、その時と同様に考えることができなかった。同様に考えてしまうと、日本人による虐待に賛同してしまうことになるかと思ったからだ。

次に特徴的な感想を数例挙ると次のようなものがあった。

（空襲—B）やはり、経験者の体験談やその地域の深い歴史などを学べる本講義のような場が非常に大切であると思った。そして、本講義を聞いた他の生徒がどのように感じ、どのように受け止めているのか知りたいと思った。自分が学んだ歴史をどう伝えていくのか考えたとき、明確な答えが出なかったのだ

現代史の授業で「不適切な感情」をどのように扱うか

が、本講義を聞いた人たちと意見を共有することで、本講義がどこまで生徒に届いているのか分かり、また伝える方法を話し合うことで、何が見えてくるのかがあるのではないかと思う。…略…日常生活の中でなかなかこうした深い内容を友達と話す機会がないが、今の世界情勢を見るに、こうした内容を積極的に触れていくべきものであると思った。

(空襲—C) 今まで、この授業はもちろん義務教育の中や、テレビ番組で戦争のことを学んできましたが、それらは戦争のごく一部であること、また、私はまだまだ何も戦争のことを知らないということを痛感しました。

(空襲—D) 戦争については正直あまり興味がなく、ビデオも眠いなと思いました。でも、空襲の地図が出て、私の出身地、八王子市も含まれていたのを見て少し自分のことのように感じられました。私たちの世代は戦争とは無縁で平和な時代に生まれたので、戦争について考える機会が全くないので、こういった公演^{マツ}の場は大切ですが、そこにいる人が聞くかどうか、心に響くかどうかは、また別に努力しないとなかなかひびかないなと思いました。

(空襲—E) 戦争経験者と戦争未経験者はやっぱり考え方が異なるし、伝えることもそんなに簡単なことじゃないんだと改めて感じ、どうすれば、戦争未経験者が戦争経験者のように説得力をもって、戦争について伝えられるのか、改めて考え直さなければならないと思うようになりました。

これら感想文を紹介したあと、今後の課題として(1)戦争の辛さを理解することは難しい。とはいえ、憎悪や不快感は「伝染」しやすい(参照、慰安婦や徴用工問題での応酬など)のはなぜか?(2)(戦争に憎しみがあったことを不可視化しないで)「憎しみの連鎖」をどう断ち切る学習が必要か?という課題をあげた。

最後の授業では、これら感想文や課題を踏まえたまとめとして(i)和解という行為は、被害者側、加害者側すべてが同じ気持ちになることを前提とする「わかりあえる」至上主義に陥っているようなので、「わかりあえる」観の相対化が必要ではないかとし、次に、(ii)「忘却でもないし、『和解』という名で負い目を消毒するような心性を欲しない態度も必要ではないか」と述べた。そ

のあと、具体的“処方箋”として、(A) 自分が不当に扱われているなど「不適切な感情」を可視化しつつ、「不適切な感情」を抑える勇気をもつ、(B)「憎悪」に対する免疫機能をつけるという2点をあげた。現時点で振り返ると、やや精神論に傾いている感もあり、躊躇する所はあるが、「不適切な感情」を克服する心構えとして自覚して欲しいという気持ちで述べたものである。

3：2019年度の試験回答から

それでは、最後に2019年度の試験問題と回答を紹介して、本稿のまとめに向かっていきたい。

【資料1 2019年度の試験問題】

本年度は、(戦争経験の継承問題も含めて)歴史意識に関する「憎悪・敵愾心、自分は正しいのに不当に扱われている感」の取り扱いについて考えてきました。こうした「不適切な感情」を新しい世代が不可視化せずに向き合う／理解するための創意工夫について、考えたことを述べてください。

この問題に対して、あたりまえだが、「言われるまで気づかなかった」という意見が多くみられたが、参考になる回答として、以下5点(A～E)を紹介したい。

回答一A、「不適切な感情」を持つのは間違いではないし、自分が持った感情は素直に受け入れて良いと思う。しかしそれは正しい事実を知ってからのことであり、不確かな情報で起きた感情はあまり意味を成さないかもしれない。そしてその感情は決して皆が同じものを持っているのではなく異なるということも頭に入れておくべきである。このことを新しい世代が受け入れ向き合ってくれるためには、その前の世代も大事になってくる。なぜならば、人とは違う自分に戸惑うことも多々ある。しかし、そのときに前の世代の人々、親などがそれは間違いではない。皆いろいろな感情を持っているから大丈夫だと伝えてくれることで、新しい世代は安心感を与えることができ、進んで理解してくれると思うからだ。

現代史の授業で「不適切な感情」をどのように扱うか

回答—Aは「正しい事実」によって「不適切な感情」を教育的にコントロールできるという意見であろう。それでは、教科書が「正しい事実」を提示しているのか？かかる疑問に教科書（または歴史教育）を再考すると、つぎのような回答が目を引く。

回答—B、高校の時に従来の教科書と「新しい歴史教科書」を読み比べるグループ学習、ディベートをしたことで、「投票によって勝敗を決めたはずですが、不思議と結果は覚えておらず、ただ初めて歴史というものについて学んだという達成感を対戦したチームとともに覚えたことが印象的です…私が経験したような授業“真の歴史授業”が行われることこそ、「不適切な感情」を不可視化せずに向き合うための土壌になると考えます。私は今の若者が思考停止や望まれる公的な語り口という選択肢をとるのは理由があると思います。彼らはとりたくて、その選択をとっているのではなく、取らざるを得なくてその選択を取っているのです。前者には従来の面白みのない教育の成果によって語彙も余裕もなく、後者には語彙はあろうともそれを表現できる場がないのです。その場を提供することこそ私たちに求められていることではないでしょうか。「不適切な感情」を伝えるべきか、それとも教育的配慮によって削除すべきかうんぬんということは、その後を考えるべきことだと思います。まずは生徒たちが歴史に興味を持ち、様々な価値観を知り、その相違をみんなで話し合うことができるという場をつくることこそが求められています。それに耳を傾け触れたときの“感情”というものは果たしてDV行為というような歴史を自分色に染める行為でしょうか。違うと私は思います。様々な見方に触れる理解しようとして感じた感情というものはそのようなものとは全く違うと考えます。その感情こそが、私たちにどうやって歴史問題を継承していけばいいかという問いの答えをくれるような気がします。

この回答は、歴史修正主義の言説も、教科書の言説も相対化されており、ある意味で理想的な学習態度だが、もう一方で事実に対する無限不信に陥るかもしれない。そのため、ややみびいき感もあり、引用に躊躇するところもあるが、授業内容を学生がどのように消化したのかを確認するために提示すると、

回答一C, 半年間, 本講義を通して, …中略…多角的な視点から歴史的事実に基づいて「憎悪, 敵愾心, 自分は正しいのに不当に扱われている感」の取り扱い方を学びました。

僕らのような若い世代が歴史的事実に基づく「不適切な感情」から目を背けずに向き合い理解するには, まず正しい歴史認識が不可欠だと思います。どの国も自国にとって都合の悪い歴史的事実を隠したがかり, 特に中高教育の教科書では歴史の綺麗な部分だけを抜粋し, 汚い部分は隠蔽し, 最悪の場合歴史のどっち上げを行うこともあります。また, 我々もそのような負の歴史的事実から目を背けたくなることもあります。そもそも知らないということも少なくありません。また, 情報過多の現代社会でどれだけが事実でどれが虚実なのかを見分けることが難しいことも事実です。

ここで先生が本講義で一貫して大切にされたてきた「理解には限界があるが理解度は更新される」, 「自分の身の丈にあった(平和を求める…引用者注記)態度が大事」という言葉が重要になってくると思います。…日韓, 日中の歴史問題に触れつつ…いつか先生が「見解の相違は共有のための第一歩であって, 分離するものではない」と話されたように, ただ, お互いにお互いの見解の相違点を主張するのではなく, 今一度自国の視点のみならず, 逆の視点, 相手側の立場になって歴史を学び直し, 両者の歴史認識の相違点を一つ一つ比較, 検討し, 多様な歴史認識の共有へと導くことが大切だと思います。…(アジアからの留学生の対話を増やしていくことを提案して)…国=個人ではないことを自覚し, 身の丈にあった態度をとることで明るい未来を築き上げていくことができると思います。

これら回答を読みつつ, あらゆるものを相対的に考えて, 考える自分の立ち位置と振舞いを社会の中で確定することが大事であり, そうした中, 冒頭で述べたように, 自分の「正義」観を相対化していくことを求めたのだが, 「不適切な感情を抱くこと自体がいけないのではなく, そのような感情を抱いた時にどう対処するかが大切だということに気づかされた」という回答もあったので, “対処法”を述べた回答を紹介したい。

現代史の授業で「不適切な感情」をどのように扱うか

回答—D、授業の最後にまとめられた2つのことが簡潔に表されているのではないか、と思った。『『不都合』なものを可視化しつつ、『不穏』な感情を抑える勇気をもつ』、『『憎悪』に対する免疫機能をつける』の2点である。…単に「戦争はこわい、嫌だ」と考えがちであり、わたしもその内の1人であったが、本講義で「知らないこと」、「考えないこと」がいちばん恐ろしいことである、と痛感した。ゲストスピーカー…の松本光さんがおっしゃっていたことが印象的であった。それは身近なものへの問題提起についてである。自分の知らない身近なところで、今何が起きていて、何が行われようとしているのか、それはどこへ向かおうとしているのか、「知ること」で「考えること」ができ、そのことに対して問題提起を続けることで思考が深まり「理解」へと繋がる。このサイクルが上記で述べた2点をより深めるのではないかと思う。

回答—E、私は当講義を通して、初めてこれまでには触れてこなかった戦争に対しての歴史意識や、今までは深く追求してこなかった感情部分に触れた、当然、初めて知ったことや新たな歴史の見方を学ぶことができた。しかし新しい歴史意識を芽生えさせることはできなかったかもしれない。なぜなら、私自身が思考停止状態であることが多かったからだ。「歴史を逆転させるもの」の中でも述べられていたが、自分の脳では考えず、相手が求める答えを答え、無難をとる。これは現代の若者も同様であり、特に勉学においてもそうである。教師や教授が述べることを、ただノートをとり、テストにでるところだけを覚え、自分で考えたり、深く学ぼうとはしない。これは歴史についても同様である。教科書やメディアによる上面の歴史を覚え、歴史を知っている気になる。

4：まとめ

暗記科目として思われがちな歴史であるが、歴史問題に対処するために、教員が教える「正しい歴史」を覚えるのではなく、「考えることが大事」ということに気づくように授業を実践しているが、回答を読むと少しは支持してくれる学生が存在するようである（授業の初回で、自虐でも、自尊でもない自省史観の獲得と述べている）。

改めて確認するが、2019年度の授業の目的は、「自分は正しいのに不当に扱われている」という感情に気づくことであった。不適切な感情が個々別々に自己完結的に存在しているわけではなく、この「不当に扱われている」感が他者への憎悪に向かっていくように、自己救済欲求が負の連鎖を引き起こしているのである。

ちょうど、この原稿の草稿を書いている頃、新型コロナが流行し、「理性無き不安」が人びとに感染していくような社会の動きを見てきた。確かに、分かることで、安心を得ることも有るが、早く答えを知りたいという焦りで手に入れた、「分かる」(回答)が社会をミスリードすることもある。歴史は未知なものがあふれている、「そう簡単に分かるのか」という気落ちを持つことが大事であり、学生には「分からない」を肯定的に受け入れることを教えることも必要ではないかと考える。それと同時に、教員も、成績評価に関するわずらわしさを回避するため「無難」な出題を出して、教養としての歴史を教えることの方法論を等閑にしていないか、再検討を痛感しつつ、毎回授業実践をしている。

歴史の中に存在する「自分は正しいのに不当に扱われている」感を見つめることで、客観的な立場に立っていると、自分たちとは遠い世界の歴史と、戦争の歴史を眺める人びとの心の中にも存在するであろう「自分は正しいのに不当に扱われている」感にまで考察が及ぶよう授業を組み立てていきたい⁹。それだけでなく、被害者意識の背後にある、肥大化した肯定的自己認識¹⁰が、歴史認識にどのような影響を与えているのかが、次の課題として存在する。

⁹ もちろん、この危機感は筆者の現状認識である。こうした見立てに基づき、現代の危機感に比重を置いて歴史を眺めると、歴史を自由に考える視点と感性を狭めることもあるので、注意する必要がある。

¹⁰ 肥大化した肯定的自己認識については、拙稿『『無知・無理解・無関心』に関する歴史的考察』(『PRIME』42号、明治学院大学国際平和研究所、2019年3月)を参照の事。